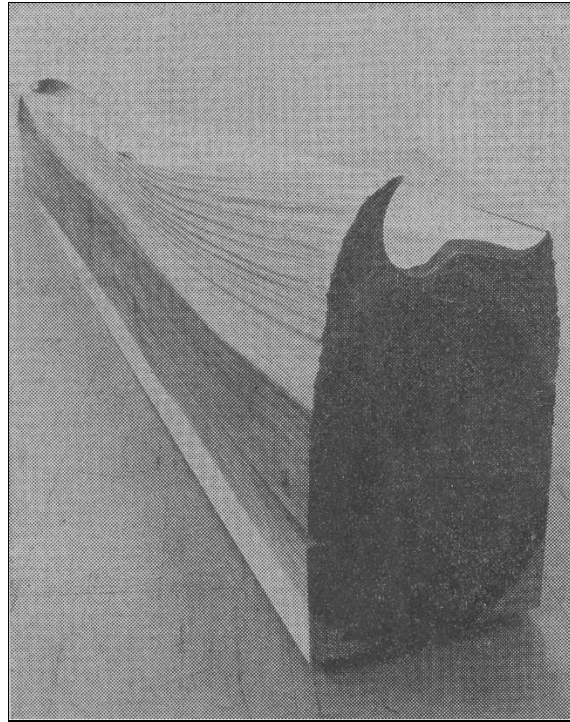


美術手帳

1975 年 3 月号

展 評



角永和夫「Wood No.5」展から

文・藤 慶 之

以上、平面の仕事を取り上げてみたが、立体の仕事にも注目する二人の作家がいた。

その一人は 角 永 和 夫 (ギャラリー16、12月3日～18日)。長さ4メートルほどもある杉の角材を上半分だけ特殊電気カンナでヘギに薄切りしている。ヘギの部分は室内の温度や湿度の影響を受けて生き物のように微妙な曲がりくねりをはじめ、ふくれ上がっていく。角材の下 半分は堅く不動の材質感を固執しているのに、ヘギ積みされた上半分は「これでも同じ 杉材か?」と思うほど材質感の変貌をみせる。この作家は以前にも、割れ目をつけた木材や、年輪まである樹脂製の木材を並べるなど、木という自然のオブジェを登場させては衝撃的な異質感の出会いを試みていたが、今回はよりストレートな表わし方となった。自然の素材に、これだけ最小限の人工を加えるだけで、作者の意図する観念がずがずがしく 出るというのは、やはり設計図の段階での思考が醸成されていたためだろう。